

第Ⅲ章 調査成果

1 各調査区の概要

調査地は、淡路島の背骨とも言える西側の山塊から、東側の大阪湾側へ張り出した尾根状地形の中腹にあり、北と南は深い谷状地形となっている。付近は棚田状を呈し、調査地もかつては水田であったが現在は休耕田となっている。地表面の標高は 75.95 m で、ほぼ水平である。

今回の調査では、調査地内に松原遺跡第 4 次調査（3 トレンチ）、第 5 次調査（2 トレンチ）、第 6 次調査（1 トレンチ）と 3 か所の調査区を設けた。以下、調査区ごとに概要を述べる。

（1）第 4 次調査区（3 トレンチ）

第 4 次調査区は調査地の最も南側に設けた調査区である。11.0 m × 7.0 m の長方形の調査区で、南西部に小規模な拡張区が付属する。

基本層序は調査区の西部と東部で大きく異なる。調査区の西部は現代の耕土、床土（1、2 層）合わせて厚さ 0.25 m、その直下は黄褐色砂質土（12 層）で、いわゆる風化花崗岩のバイラン土と呼ばれる真砂土に花崗岩を主体とした 0.3 ～ 1.0 m 大の礫が混入する地山層である。この地山層の上面は東方向に下降しているため、調査区東部には厚い土層が堆積している。

a) 基本層序（図版 1）

調査区の東部では、現代耕土、床土（1、2 層）の下にて黒褐色粘質土のブロックが混じる褐色砂質土（3 層）が認められる。この層は上層の耕土層を水平に保つために人工的に盛られた土層とみられ、調査区の東部では厚さ 0.3 m を測るが、西に向かって徐々に薄くなり調査区の西端には及ばない。その下には褐灰色砂泥層（4 層）と 4 層が土壌化した 25 層が堆積している。25 層は一時期の耕作土と考えられ、東壁では畔と考えられる高まり（16、17 層）も認められる。調査区の東部では厚さ 0.6 m であるが、西に向かって徐々に薄くなり、やはり調査区の西端には及ばない。この下が中世の遺物包含層である暗褐色砂泥層（9 層）で、調査区の中央部から東側にのみ分布する。調査区の東部で厚さ 0.5 m で、西側に向かって徐々に薄くなる。その下が黄褐色砂質土（12 層）の地山層である。

b) 第 1 面の遺構（図版 2）

調査は中世の遺物包含層である暗褐色砂泥層（9 層）を第 1 層、その上面を第 1 面としたが、この層は上述の如く調査区の東半にのみ分布する。つまり、第 1 面の西半は地山面ということになる。第 1 面ではピット 12 基、土坑 4 基、溝 1 条を検出した。しかしながら、9 層上面で検出した遺構は溝 1 条（S D 1）のみであり、他は地山面で検出したものである。したがって、S D 1 は中世以降の遺構であるが、他の遺構は層位的に時期を判断することが困難である。また、各遺構から出土した遺物も小片で時期の確定はできない。

S D 1 は南西から北東方向に延びる幅 0.2 m、深さ 0.05 m の浅いものである。ピット群は調査区の中央付近に集中し、大半が径 0.2 ～ 0.3 m の円形で、柱痕跡の残るものも認められるが、建物等としてまとめることはできなかった。土坑は 4 基検出したが、いずれも 1.0 m 前後の不定形なもので、底部も凹凸が激しく樹木痕の可能性が高い。

c) 第 2 面の遺構（図版 3）

第 2 面として、調査区北東部の第 1 層を除去し、地山面で遺構検出を行ったが、ここでは遺構が確認できなかった。上述の通り、第 1 面で検出した遺構の大半は地山面で検出したもので、S D 1 を除いて第 1 面と同じ遺構である。

（2）第 5 次調査区（2 トレンチ）

第 5 次調査区（2 トレンチ）は第 4 次調査区の北側に設けた。7.0 m × 11.0 m の長方形の調査区で、北東部に小規模な拡張区が付属する。

a) 基本層序（図版 4）

上層から耕土、床土（1、2 層）合わせて厚さ 0.25 m、その下に黒褐色粘質土のブロックが混じる褐色砂質土（3 層）が認められる。この層は第 4 次調査区にも分布していた、耕土層を水平に保つために人工的に盛られた土層で、調査区の東部では厚さ 0.2 m であるが、西に向かって徐々に薄くなり調査区の西端には及ばない。その下は褐灰色砂泥層（5 層、13 層）で、13 層は 5 層の上部が土壌化したものである。一時期の耕作土と考えられる。その下は灰黄褐色層砂泥に黄褐色砂質土や礫が混入した土層（6 層）が堆積する。厚さは 0.15 ～ 0.25 m である。また、調査区の西端では畔（14 層）を挟んでよく似た層（7 層）が認められるが、いずれも同時期において人工的に整地された土層と考えられる（整地層 I）。その下は中世の遺物を包含する暗褐色砂泥層（9 層）で、調査区西側では 0.2 m、北東部では 0.6 m の厚さがある。その下には弥生時代の遺物包含層である黒褐色粘質土（10 層）が、調査区の南西部から北東方向にかけて堆積している。調査区の北東で最大 0.25 m の厚さがある。その下が風化花崗岩のバイラン土からなる地山（12 層）である。

当調査区では、中世の遺物包含層である暗褐色砂泥層（9 層）を第 1 層、その上面を第 1 面、弥生時代の遺物包含層である黒褐色粘質土（10 層）を第 2 層、その上面を第 2 面として、調査を行った。

b) 第 1 面の遺構（図版 5）

第 1 面は調査区の南西から北東方向、つまり山側から海側へ緩やかに傾斜している。最も高い南西部で標高 75.3 m、低い北東部で標高 74.85 m である。遺構は、調査区の東端部分を中心にピット群を検出した。ピットの多くは柱当たりを持つ柱穴である。調査区の北東部にて小規模な建物とみられる S B 1、東端にて柵列とみられる S A 2 としてまとめることができた。なお、この第

1面に属する遺構の埋土には、地山である真砂土を含むものが多い。また後述するが、調査区の東壁沿いで検出した柵列（S A 2）を構成するピット9、10、14は、第1層の直上に堆積する整地層Ⅰ上面から成立していることが明らかである。したがって、第1面の遺構群は、整地層Ⅰ上面に成立したものとみられる。

S B 1（図版6）

南北2間、東西1間以上の建物で、さらに東側に展開すると推測される。中央にも柱穴があるので総柱状になる。西側柱列の南側2基の柱穴には別の柱穴が近接して設けられており、建て替えあるいは補強のためと思われる。柱穴はいずれも円形で径0.3～0.4 m、柱痕は0.15 m前後である。柱間は北から2.1 m、1.8 m、東西は北側が0.9 m、南側が0.8 mを測る。柱穴の埋土には風化花崗岩の真砂土が混入している。後述のS A 2とは重複関係にあるが、前後関係は不明である。

S A 2（図版6）

南北方向の柵列で、調査区の東壁に沿って3基の柱穴を確認した。柱間は北から1.7 m、4.0 mである。南側の柱穴間が広いが、本来はこの間に柱穴が1基存在したものと推測される。各柱穴は径約0.3 mの円形を呈する。柵列はさらに南北に延びると考えられる。

これらの柱穴は第1面で検出したが、調査区の東壁面に残る部分で確認したところ上層の整地層Ⅰ上面から成立していることが判明した。柱穴の埋土にも整地層と同様な風化花崗岩の真砂土が混入しておりこれを傍証している。

S K 13（図版6）

S B 1の西側で検出した土坑である。径0.35 mの円形を呈し、深さ0.3 mを測る。埋土には風化花崗岩の真砂土や炭化物、焼土塊を多く含んでいる。

c) 第2面の遺構（図版7）

第2面は中世遺物包含層（第1層）を除去した、弥生時代の遺物包含層（第2層）の上面である。調査区の西壁沿いの幅3.0 m、南北壁沿いに設けた断割部分で検出している。調査区の南西部には弥生時代遺物包含層である黒褐色粘質土の分布は認められず、直接地山がのぞいている。第2面は調査区の南西側が高く北東側に傾斜している。

検出した遺構はピット3基と土坑1基である。

ピット 202・203・205

いずれも第2面上面で検出した。径0.15 m程度の小型のもので柱痕跡は認められない。杭跡等になるものと想定される。

S K 204

調査区南西部の地山上面で検出した。幅 0.9 m、長さ 1.9 m 以上、深さ 0.15 m の不定形な土坑である。第 4 次調査区にて検出された樹根跡とみられる土坑と同じものと推測できる。

なお、これとは別に北壁沿いの断割で、弥生時代の遺物包含層上面から成立する柱穴を 1 基確認している。

(3) 第 6 次調査区 (1 トレンチ) (図版 8)

第 6 次調査区は調査地の北西端に設けた、東西 2.0 × 3.0 m の方形の調査区である。基本層序は耕土、床土直下はいわゆる風化花崗岩のバイラン土の地山である。地山面の標高は 75.75 m 前後を測る。地山面にて遺構検出を行ったが、耕作に伴う畝溝が数条認められたものの顕著な遺構は検出できなかった。出土遺物も近世の染付、陶器がわずかに認められたのみである。

2 出土遺物

(1) 第4次調査区(3トレンチ)(図版9、13、14)

a) 第1面出土遺物

1、2は土師器皿である。1は復元底径8.0cm、底部～体部立ち上がり部が残存しており、残存器高は0.7cmである。底部外面は平坦で、体部が直線的に立ち上がる。内面にロクロナデ、体部外面に回転ケズリの痕跡が認められるが、底部外面の調整は摩滅のために不明瞭である。胎土は密で、焼成は良好である。2は復元底径6.5cm、底部～体部立ち上がり部が残存しており、残存器高は1.0cmである。底部外面は平坦で、体部は内湾気味に立ち上がる。内外面にロクロナデ、底部外面に回転糸切の痕跡が認められる。胎土は密で、焼成は良好である。

3は東播系須恵器の鉢で、口縁部のみ残存しており、断面形は丸みを帯びたT字状を呈する。胎土は密で、焼成は良好である。14世紀の所産と考えられる。

4は備前の播鉢で、体部から口縁部が残存しているが、口縁端部は欠損している。体部は直線的に伸び、口縁部で外面がやや外傾し、内面は直立気味に立ち上がる。内面に6条一単位の揃り目が施される。14世紀後半～15世紀前半の所産と考えられる。

5は青磁碗で、口縁部が残存している。外面に陰刻による花卉らしき文様が認められるが、判然としない。

これらの遺物は何れも遺構検出中に出土しており、室町時代の所産と考えられる。

b) 第1層出土遺物

6～10は土師器皿である。6は復元口径7.4cm、復元底径6.0cm、器高0.9cmである。底部外面は平坦で、体部は直線的に伸び、口縁端部は丸みを帯びる。内外面にロクロナデが施され、底部外面に回転糸切の痕跡が認められる。胎土は密で、焼成は良好である。7は復元口径11.2cm、復元底径6.0cm、器高は2.4cmである。底部外面は平坦で、体部は直線的に伸び、口縁端部が尖り気味に収められる。内面にロクロナデ後ナデ、体部外面にロクロナデが施される。底部外面は、ナデ調整によって切り離しの痕跡が消される。胎土は密で、焼成は良好である。8は口縁部～体部が残存しており、復元口径は10.8cm、残存器高は1.5cmである。口縁端部はやや丸みを帯びた平坦面をなす。9は底部～体部立ち上がり部が残存しており、復元底径は7.8cm、残存器高は0.8cmである。底部外面は平坦で、体部は直線的に立ち上がる。内外面にロクロナデが施され、底部外面には糸切痕跡が認められる。胎土は密で、焼成は良好である。10は底部～体部立ち上がり部が残存しており、復元底径は8.6cm、残存器高は1.1cmである。底部外面は平坦で、体部は直線的に立ち上がる。内外面にロクロナデが認められるが、底部外面は摩滅のため不明瞭である。胎土は密で、焼成は良好である。

(2) 第5次調査区(2トレンチ)(図版9、10、13、14)

a) 第1面出土遺物

11、12は土師器皿である。11は口縁部から体部が残存している。復元口径12.0cm、残存器高2.3cmである。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は直立気味になり、端部はやや尖り気味に成形される。外面にヘラケズリ、内面にナデ、口縁部にはヨコナデが施される。胎土は密で、焼成は良好である。12は土師器皿で、復元底径6.4cm、残存器高1.0cmである。底部外面は平坦で、体部は直線的に立ち上がる。体部内外面および底部内面にロクロナデが施され、底部外面に回転糸切の痕跡が認められる。胎土は密で、焼成は良好である。

13は東播系須恵器の鉢で、口縁部のみ残存しており、復元口径23.2cm、残存器高3.0cmである。内外面にロクロナデが施され、口縁部は丸みを帯びたT字形の断面形を呈する。胎土は密で、焼成は良くない。14世紀の所産と考えられる。

14は青磁碗と考えられる。口縁部、底部共に欠損しているため、法量は不明。胎土は密で、焼成は良好である。

15は焼土塊であるが、用途不明である。

11はピット11、12はピット5、13は遺構検出中、14はピット12、15はSK13から出土した。これらの遺物は室町時代の所産と考えられる。

b) 第1層出土遺物

第1層から出土した遺物は、室町時代の所産と考えられる物が主体をなす。

16～36は土師器皿である。16は口径6.3cm、底径4.0cm、器高1.2cmである。底部外面は平坦で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は肥厚して端部はやや尖り気味に成形される。内外面にロクロナデが施され、底部外面に回転糸切の痕跡が認められる。胎土は密で、焼成は良好である。17は復元口径5.8cm、復元底径4.2cm、器高1.0cmである。底部外面は平坦で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部で内面がやや肥厚して端部は丸みを帯びる。体部外面から底部内面にかけてロクロナデが施され、底部外面に回転糸切の痕跡が認められる。胎土は密で、焼成は良好である。18は復元口径7.3cm、復元底径7.0cm、器高0.7cmである。底部外面は平坦で、体部はほぼ直立して口縁端部は丸みを帯びる。体部外面から底部内面にかけてロクロナデが施され、底部外面に回転糸切の痕跡が認められる。胎土は密で、焼成は良好である。19は復元口径6.5cm、復元底径5.8cm、器高1.5cmである。底部外面は平坦で、体部はほぼ直立し、口縁端部は丸みを帯びる。摩滅のため調整は不明瞭であるが、底部外面に回転糸切と思われる痕跡が認められる。20は復元口径8.2cm、復元底径6.0cm、器高1.6cmである。底部外面は平坦で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。体部外面から底部内面にかけてロクロナデが施され、底部外面に回転糸切と思われる痕跡が認められる。胎土は密で、焼成は良好である。21は口縁部～体部が残存している。復元口径8.9cm、残存器高1.0cmである。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。胎土は密で、焼成は良好である。22は口縁部～体部が残存している。復元口径9.9cm、

残存器高 1.9 cm である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味に成形される。内外面にロクロナデが施される。胎土は密で、焼成は良好である。23 は口縁部～体部が残存している。復元口径 11.9 cm、残存器高 1.9 cm である。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は尖り気味に成形される。内外面にロクロナデが施される。胎土は密で、焼成は良好である。24 は口縁部～体部が残存している。復元口径 10.9 cm、残存器高 1.6 cm である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。内外面にロクロナデが施される。胎土は密で、焼成は良好である。25 は復元口径 7.8 cm、復元底径 4.4 cm、器高 2.3 cm である。底部外面は平坦で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。体部外面から底部内面に掛けてロクロナデが施され、底部外面に回転糸切と思われる痕跡が認められる。胎土は密で、焼成は良好である。26 は底部を欠損している。復元口径 11.8 cm、残存器高 3.6 cm である。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味に成形される。内外面にロクロナデが施される。胎土は密で、焼成は良好である。27 は底部～体部が残存している。復元底径 6.0 cm、残存器高 0.8 cm である。底部外面は平坦で、体部は直線的に立ち上がる。体部内外面にロクロナデが施され、底部外面に糸切痕跡が認められる。胎土は密で、焼成は良好である。28 は底部～体部が残存している。復元底径 7.0 cm、残存器高 1.1 cm である。底部外面は平坦で、体部は直線的に立ち上がる。体部内外面にロクロナデが施され、底部外面に糸切痕跡が認められる。胎土は密で、焼成は良好である。29 は底部～体部が残存している。復元底径 8.0 cm、残存器高 1.2 cm である。底部外面は平坦で、体部は直線的に伸びる。内外面とも摩滅が著しく、調整は判然としない。胎土は密で、焼成は良好である。30 は小片のため、口径復元をすることができなかった。残存器高は 0.9 cm である。底部外面は平坦で、体部は直立に近い角度で立ち上がった後、外反して直線的に伸びる。体部内外面、底部内面にロクロナデが施され、底部外面に回転糸切の痕跡が認められる。胎土は密で、焼成は良好である。31 は底部～体部が残存している。復元底径 6.0 cm、残存器高 0.8 cm である。底部外面は平坦で、内外面にロクロナデが施され、底部外面に糸切痕跡が認められる。32 は底部～体部が残存している。復元底径 6.0 cm、残存器高 0.8 cm である。底部外面は平坦で、内外面にロクロナデが施され、底部外面には回転糸切の痕跡が認められる。胎土は密で、焼成は良好である。33 は底部～体部が残存している。復元底径 7.2 cm、残存器高 1.5 cm である。底部外面は平坦で、体部は内湾気味に立ち上がる。体部内外面にロクロナデが施され、底部外面には回転糸切の痕跡が認められる。胎土は密で、焼成は良好である。34 は底部～体部が残存している。復元底径 7.0 cm、残存器高 0.9 cm である。底部外面は平坦で、体部は内湾しながら立ち上がる。内外面にロクロナデが施され、底部外面に回転糸切の痕跡が認められる。胎土は密で、焼成は良好である。35 は復元底径 6.0 cm、残存器高 1.1 cm である。底部外面は平坦で、体部内外面および底部内面にロクロナデが施され、底部外面に糸切痕跡が認められる。胎土は密で、焼成は良好である。36 は底部～体部が残存している。復元底径 7.0 cm、残存器高 1.1 cm である。底部外面は平坦で、体部は内湾しながら立ち上がる。内外面にロクロナデが施され、底部外面に回転糸切の痕跡が認められる。胎土は密で、焼成は良好である。37、38 は土師器甕ないし鍋と考えられる。37 は体部のみ残存しており、口縁部および底部を欠

損しているため、法量は不明である。外面にナデ、鰐部より上の内面にヨコナデ、下に板ナデが施される。胎土は密で、焼成は良好である。38は口縁および底部を欠損しているため、口径は不明である。体部は直線的で、口縁近くに突帯を貼り付ける。外面にナデおよびタタキ、突帯より上の内面にナデ、下に板ナデを施す。胎土は密で、焼成は良好である

39～41は須恵器である。39は口縁部のみ残存している。40は甕の口縁部と思われる。41は東播系須恵器の鉢で、口縁部が残存しているが、小片のため、口径復元は不可能であった。体部は直線的に伸び、口縁部および口縁端部が丸みを帯びる。体部外面から口縁部内面にかけてロクロナデ、体部内面にナデが施される。胎土は密で、焼成は良好である。14世紀の所産と考えられる。

42は黒色土器A類の碗で、高台部が残存している。復元底径6.0cm、残存器高1.2cmである。高台は体部立ち上がり部に張り付けられ、高さは低く、三角形の断面を呈する。内外面にナデ、内面に暗文が施される。胎土は密で、焼成は良好である。10世紀の所産か。

43は瓦器碗で、口縁部～体部が残存している。復元口径13.8cm、残存器高2.6cmである。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反し、口縁端部は丸く成形される。内面にナデのちミガキ、口縁部外面にヨコナデが施され、体部外面にオサエの痕跡が認められる。胎土は密で、焼成は良くない。和泉型Ⅲ段階3期～Ⅳ段階1期に属し、13世紀前半の所産と考えられる。

44は青磁であるが、器形は不明。

45～47は土錘である。45は全長5.6cm、直径は最小0.7cm、最大1.3cm、中央の穿孔は直径0.25cmを測る。46は全長4.6cm、最大径1.5cm、最小径0.9cm、中央の穿孔は直径0.7cmである。胎土は密で、焼成は良好である。47は全長6.1cm、最大径3.7cm、最小径1.9cm、中央の穿孔は直径1.7cmである。胎土は密で、焼成は良好である。

48は弥生土器高杯の脚柱部で、直径3.6cm、残存器高3.1cmである。外面の調整は摩滅のため、不明瞭。

49は調査区東壁清掃中に出土した銭貨で、「皇宋通寶」である。直径2.5cm、厚さ0.12cm。

50は焼土塊であるが、用途不明である。

c) 第2面出土遺物

51～54は弥生土器である。51は壺の口縁部で、復元口径19.2cm、残存器高3.8cmである。内外面にヨコナデが施され、口縁端部は丸みを帯び、端部からやや下に凹線文が一条施される。胎土は密で、焼成は良好である。後期の所産か。

52～54は壺ないし甕の底部である。52は復元底径7.0cm、残存器高2.9cmである。底部外面は平坦で、体部が直線的に立ち上がる。体部外面にタタキ、内面にハケが施され、底部外面は調整不明である。胎土は密で、焼成は良好である。中期後葉～後期の所産か。53は復元底径8.0cm、残存器高3.2cmである。底部外面は平坦で、体部は直線的に立ち上がる。体部外面にタタキ、底部外面にナデがほどこされるが、体部内面は摩滅の為、調整不明。胎土は密で、焼成は良好である。後期の所産か。54は復元底径10.0cm、残存器高3.2cmである。底部外面は平坦で、体部は直線的

に立ち上がる。体部外面下端部にオサエの痕跡が認められるが、上部および内面は摩滅の為調整は不明、底部外面にナデが施される。胎土は密で、焼成は良好である。後期の所産か。

これらの遺物は遺構検出中に出土した。

d) 第2層出土遺物

55～60は弥生土器である。55は高杯の脚部あるいは器台と考えられ、残存器高3.9cmである。内外面にナデが施される。胎土は密で、焼成は良好である。後期の所産か。

56は鉢の口縁部と考えられ、復元口径28.0cm、残存器高1.9cmである。体部もしくは頸部から外方へ強く屈曲して伸び、口縁端部よりやや下に二条の凹線文が施される。胎土は密で、焼成は良好である。後期の所産か。

57は壺の口縁部と考えられる。体部あるいは頸部が外反しながら伸び、口縁部で内方に強く屈曲してほぼ直立し、口縁端部はやや外傾する平坦面をなす。体部（頸部）外面にナデ、口縁部内外面にヨコナデが施される。胎土は密で、焼成は良好である。後期の所産か。

58、59は壺ないし甕の底部である。58は小片の為、底径復元は不可能であった。残存器高は1.4cm。平坦な底部から直線的に体部が立ち上がる。内外面とも摩滅の為、調整不明。胎土は密で、焼成は良好である。後期の所産か。59は復元底径4.2cm、残存器高3.0cmである。底部外面は中央が窪んで高台状を呈し、体部は直線的に立ち上がる。底部外面および体部下端部にオサエ、体部外面にタタキ、内面にナデが施される。胎土は密で、焼成は良好である。後期の所産か。

60は口縁部であるが、器形は不明。復元口径17.4cm、残存器高4.7cmで、内湾しながら立ち上がり、端部は丸みを帯びる。内面にナデ、端部にヨコナデが施されるが、外面は摩滅の為、調整不明である。胎土は密で、焼成は良好である。

表 1 遺物観察表

掲載 No	器種	器形	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	厚 (cm)	色調	備考
1	土師器	皿	第4次	第1面	-	(0.7)	8.0	-	7.5YR6/4 にぶい橙	
2	土師器	皿	第4次	第1面	-	(1.0)	6.5	-	7.5YR7/4 にぶい橙	
3	須恵器	鉢	第4次	第1面	-	(2.1)	-	-	2.5Y7/1 灰白	東播系
4	備前	播鉢	第4次	第1面	-	(5.7)	-	-	5YR5/2 灰褐	
5	青磁	碗	第4次	第1面	-	(3.2)	-	-	胎：7.5YR7/4 にぶい橙 釉：10YR7/3 にぶい黄橙	
6	土師器	皿	第4次	第1層	7.4	0.9	6.0	-	7.5YR7/4 にぶい橙	
7	土師器	皿	第4次	第1層	11.2	2.4	6.0	-	7.5YR6/4 にぶい橙	
8	土師器	皿	第4次	第1層	10.8	(1.5)	-	-	7.5YR6/3 にぶい褐	
9	土師器	皿	第4次	第1層	-	(0.8)	7.8	-	7.5YR6/4 にぶい橙	
10	土師器	皿	第4次	第1層	-	(1.1)	8.6	-	7.5YR7/4 にぶい橙	
11	土師器	皿	第5次	第1面	12.0	(2.3)	-	-	7.5YR7/4 にぶい褐	
12	土師器	皿	第5次	第1面	-	(1.0)	6.4	-	10YR8/3 浅黄橙	
13	須恵器	鉢	第5次	第1面	23.2	(3.0)	-	-	10YR8/3 浅黄橙	東播系
14	青磁	碗	第5次	第1面	-	(2.5)	-	-	胎：7.5YR7/4 にぶい橙 釉：7.5Y6/2 灰オリーブ	
15	土製品	焼土塊	第5次	第1面	-	-	-	-	7.5YR4/6 褐	
16	土師器	皿	第5次	第1層	6.3	1.2	4.0	-	10YR8/4 浅黄橙	
17	土師器	皿	第5次	第1層	5.8	1.0	4.2	-	10YR8/4 浅黄橙	
18	土師器	皿	第5次	第1層	7.3	0.7	7.0	-	10YR7/3 にぶい黄橙	
19	土師器	皿	第5次	第1層	6.5	1.5	5.8	-	7.5YR6/4 にぶい橙	
20	土師器	皿	第5次	第1層	8.2	1.6	6.0	-	7.5YR7/4 にぶい橙	
21	土師器	皿	第5次	第1層	8.9	(1.0)	-	-	7.5YR8/4 浅黄橙	
22	土師器	皿	第5次	第1層	9.9	(1.9)	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙	
23	土師器	皿	第5次	第1層	11.9	(1.9)	-	-	10YR8/4 浅黄橙	
24	土師器	皿	第5次	第1層	10.9	(1.6)	-	-	7.5YR8/4 浅黄橙	
25	土師器	皿	第5次	第1層	7.8	2.3	4.4	-	7.5YR7/4 にぶい橙	
26	土師器	皿	第5次	第1層	11.8	(3.6)	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙	
27	土師器	皿	第5次	第1層	-	(0.8)	6.0	-	7.5YR7/4 にぶい橙	
28	土師器	皿	第5次	第1層	-	(1.1)	7.0	-	7.5YR6/4 にぶい橙	
29	土師器	皿	第5次	第1層	-	(1.2)	8.0	-	7.5YR7/4 にぶい橙	
30	土師器	皿	第5次	第1層	-	(0.9)	-	-	7.5YR6/4 にぶい橙	
31	土師器	皿	第5次	第1層	-	(0.8)	6.0	-	7.5YR8/4 浅黄橙	
32	土師器	皿	第5次	第1層	-	(0.8)	6.0	-	10YR8/4 浅黄橙	
33	土師器	皿	第5次	第1層	-	(1.5)	7.2	-	7.5YR7/4 にぶい橙	
34	土師器	皿	第5次	第1層	-	0.9	7.0	-	7.5YR7/6 橙	
35	土師器	皿	第5次	第1層	-	(1.1)	6.0	-	7.5YR7/4 にぶい橙	
36	土師器	皿	第5次	第1層	-	(1.1)	7.0	-	10YR7/4 にぶい黄橙	
37	土師器	甕 or 鍋	第5次	第1層	-	(3.3)	-	-	7.5YR6/4 にぶい橙	
38	土師器	甕 or 鍋	第5次	第1層	-	(4.8)	-	-	7.5YR8/4 浅黄橙	
39	須恵器	-	第5次	第1層	-	(2.7)	-	-	5YR5/2 灰褐～5YR7/6 橙	口縁
40	須恵器	甕	第5次	第1層	-	(3.7)	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙～ 7.5YR5/2 灰褐	口縁
41	須恵器	鉢	第5次	第1層	-	(2.9)	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙	東播系、口縁
42	黒色土器 A 類	碗	第5次	第1層	-	(1.2)	6.0	-	内：N3/0 暗灰 外：2.5YR6/6 橙	高台
43	瓦器	碗	第5次	第1層	13.8	(2.6)	-	-	内：2.5Y8/1 灰白 外：N4/0 灰	
44	青磁	-	第5次	第1層	-	(2.4)	-	-	胎：10YR7/1 灰白 釉：5GY6/1 オリーブ灰	
45	土製品	土錘	第5次	第1層	長 5.6	幅 1.3	-	1.2	10YR7/4 にぶい黄橙	
46	土製品	土錘	第5次	第1層	長 4.6	幅 1.5	-	1.5	5YR7/4 にぶい黄橙	
47	土製品	土錘	第5次	第1層	長 6.1	幅 3.7	-	3.7	7.5YR7/4 にぶい橙	
48	弥生土器	高杯	第5次	第1層	径 3.6	(3.1)	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙	脚柱
49	銭貨	皇宋通寶	第5次	第1層	径 2.5	-	-	0.12	-	
50	土製品	焼土塊	第5次	第1層	-	-	-	-	7.5YR4/6 褐	
51	弥生土器	壺	第5次	第2面	19.2	(3.8)	-	-	7.5YR7/6 橙	口縁部
52	弥生土器	甕 or 壺	第5次	第2面	-	(2.9)	7.0	-	10YR5/1 褐灰	底部
53	弥生土器	甕 or 壺	第5次	第2面	-	(3.2)	8.0	-	7.5YR6/4 にぶい橙	底部
54	弥生土器	甕 or 壺	第5次	第2面	-	(3.2)	10.0	-	10YR8/3 浅黄橙～2.5Y4/1 黄灰	底部
55	弥生土器	高杯 or 器台	第5次	第2層	-	(3.9)	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙	脚部
56	弥生土器	鉢	第5次	第2層	28.0	(1.9)	-	-	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁部
57	弥生土器	壺	第5次	第2層	-	(3.4)	-	-	7.5YR6/4 にぶい橙	口縁部
58	弥生土器	甕 or 壺	第5次	第2層	-	(1.4)	-	-	7.5YR6/4 にぶい橙	底部
59	弥生土器	甕 or 壺	第5次	第2層	-	(3.0)	4.2	-	5YR5/4 にぶい赤褐	底部
60	弥生土器	-	第5次	第2層	17.4	(4.7)	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部